

## 序に寄せて

人生には思うようにいかないこと、哀しいことが多すぎる。

生きるために生まれてきたというのに早世そうせいしたり、愛しているのに別離を迎えたり、老いて病苦さいなに苛まれたり、罪もないのに他人から殺傷されたりする不条理もある。

そうした人生の無常に加え、最近では長引く不況から起る生活不安、自殺や犯罪など痛ましい事件が増加し、テロや戦争の恐怖もあれば環境問題も深刻化してきた。

本書はシリーズ名を「哀しみの世に生きる」とした。今よりもっと苛酷かこくな歴史は古今東西にあるし、人間それぞれが抗こうしがたい現実に悲観を伴いながら生きてきたわけだか

ら、今だけを「哀しみの世」と言い切つてしまふことに抵抗がないわけではないが、今や、過去のそれよりもっと得体の知れない不気味な魔性が世の中に跋扈し始めた感じがする。

豊かさに慣れればなれるほど、人間の心の底で牙を研ぐエゴが偽善と自己保身を誘い、他者を抹殺する現象の増加を考えると、現代ほど虚無の深淵を痛感する時代はない。人間が豊かさ、幸福を求めて今日を生きているというのに、肥大化していく欲望の渦に巻き込まれて苦しみを増すというのなら未来に何の展望もない。これが哀しみの世でなくて何であろうか。

けれども、哀しみを共有することなしに新しい時代は到来しない。仏教は世の無常と人間に内在する業を説くが、個々の心を基調として精神文化を立て直す味わい深い示唆が秘められている。

仏陀は、難行苦行の後、深い徹底した「定」の中で苦滅の道をお悟りになり、「仏の教え」を伝えられた。これが仏教であるが、それは現実認識に立脚し、流転する心に不動の境地を定めさせ、魂を純化させるところに生の価値を置き、澄んだ眼を持たせることによつて幸福と平和を導き出そうとしている。

人間が欲望や執着や対立という自我意識を抑え、反省や感謝の念を養うことができるなら少しは局面は変わるだろう。欲望があるから社会は発展し、人類の幸福も保証されるといふ考え方もあるが、それは「快感」といふべきであつて、必ずしも眞の幸福につながるとは限らない。事実、快適な生活ができるようになったというのに、多くの人は今なお、なぜ生きるのか、どう生きればいいのか、もがき苦しみながら進むべき方向をまさぐつてゐるではないか。

思えば、心の中心である人間の意識というものは、欲望の風にいとも簡単に煽り立てられる。この国の人々は豊かさに慣れきつて、美しいもの、かわいいもの、おいしいもの、便利なものを幸福の対象のように思い込んでゐる。幸福感はそれぞれとしても、そのような五官で得る喜びは眞の心の寄る辺とはなり得ないのである。とどまることのない欲望は幸福を無限の彼方に追いやってしまふ。

心の世界には海のような深さと無限の広がりがある。表層的な意識の波を静め、落ちて着いて心を見極めると、欲望の風さえもとどかない静寂な世界に到達し、人間は生きてゐるのではなく、生かされてゐるといふことを実感する。

この原点に帰りさえすれば、自殺や犯罪、戦争やテロ、さらには環境問題に至るまで

哀しみの世はおのずと歡喜に満ちた世の中に変わるはずである。このような価値を有する仏教国でありながら、哀しいことに日本人はあまりにもその価値を知らなさすぎる。

羅針盤と海図なき航海——。私は今という時代をそのようにとらえつつ、本書を通じて混迷する世相の問題点と世の処し方を考えてみたいと思つた。

第一巻では、現代に生きる人間から「善玉と悪玉」をあぶり出してみた。しばしば自己の実存性を見出せなくなった人間の悶えもたに起こる昨今の凶悪犯罪などに、私は新しい魔性ましやうの業わざを思う。「誰でもいいから刺したかった」とか「人を殺す体験を試してみたかった」という供述を聞かされる昨今、背景にある人間疎外そがい、孤立感というものを無視することはできない。それを解決するキーワードは「連帯感の復権」である。

第二巻では戦争と平和、環境問題について取り上げることになっている。ここにも人類の業わざが横たわっている。平和を勝ち取るために行われる戦争や、産業発展の陰に深刻化する環境の悪化をどう考えればいいのか。

第三巻では生命倫理りんりの問題を取り上げることになっている。これは仏教の生命観と現代医学の生命観の比較ということになろう。生命科学にも光と影の部分があるが、生命操作の是非を仏教的視点から論じたい。

ただ、こうした世俗の問題に仏教はあまり首を突っ込まない方がよいという考え方もあるし、逆に社会の問題に眼を背けて自分だけが平穩無事な生活を送るのは無慈悲だと指摘する人もいる。どちらが宗教家のあるべき姿なのか、これは実に微妙な問題である。

仏陀ぶつだは悟りを開いた後にマガダ国の王舎城という当時インド最大の都で布教伝道を開始されたというから、進んで社会との関わりを持たれたと考えられる。事実、仏陀は街から遠すぎず、近すぎず、静かな場所に身を置かれ、王族、商人、手工業者など都市民の相談に応じられた。庶民から国王に至るまで人々は仏陀を心の支えとして尊信していたのである。

二千五百年前の古代インドを背景にした仏陀の教えがただちに現代に通じるとはいえないが、驚くことにそこには人類を幸福と平和に導く光明こうみやうがある。けれども、残念なことこれまでの仏教書には、心の問題は説かれていても現代が求めている社会問題への具体的な提案がなかった。

だがしかし、これからの仏教は現代社会から眼を背けることはできなくなった。それは、この国にとって大乘仏教が有用か、無用かが問われていると言い換えても過言では

ない。そこで、仏教の復権を願ひ、今日の社会問題を列挙し、私なりに仏教的な視点から世に処するヒントを綴ることにしたのである。

良寛りょうかんのように、山中にこもつて少欲知足、清淨安穩しやうじやうあんのんな生き方ができたらいいが、少なくとも私は人間同胞の苦しみや社会の不安を見捨てることはできない。もちろん政治家のように華々しい活動はできないが、政治をする人、教育する人に示唆しそを与えることはできる。おそらく仏陀もそのような道を歩まれたにちがいない。

たとえ表層的な幸せであろうと、それでいいと感じている人にとって、ことさらに仏教は必要ないかもしれないが、この実存的苦悩に打ち沈む哀しみの世をどう生きるべきか考えてみる機会があつてもいいのではないだろうか。

そういう思いから、この哀しみの世に対する処し方を書き下ろすことにする。稚拙ちせつな内容に終わるかもしれないが、仏教と現代の関わりを知る参考になればいい。

平成十五年如月

善玉と悪玉 ● 目次

序に寄せて ..... 1

第1話 善玉と悪玉に思う ..... 11

この国の哀しみ ..... 12

遺恨いこんの情念 ..... 19

悪玉の更正 ..... 26

償たがうということ ..... 47

仏性ぶつしょうについて ..... 57

改悛かいしゆんの情 ..... 67

母親ぼてんの挫折ざせつ ..... 72



第2話 荒<sup>すま</sup>びし頃に思う

私の懺悔録<sup>ざんげろく</sup>

..... 81

父の生きざま

..... 92

差別と比較

..... 95

引き回される心

..... 100

御<sup>み</sup>仏<sup>ほとけ</sup>の实在

..... 102

求道の悩み

..... 113

父との離別

..... 126

第3話 心の指針

目線を合わせる

..... 134

心の寄る辺<sup>よべ</sup>

..... 144

そつと握る ..... 152

人生訣別けつべつのとき ..... 156

幸福とは何か ..... 159

#### 第4話 夜明けに向かつて ..... 167

哀しみを酌み取る ..... 168

夢と志ある若者のために ..... 176

ほとけの里 ..... 180

生きる目的 ..... 189

仏教しきの示唆しきするもの ..... 198

第1話 善玉と悪玉に思う

## 善玉と悪玉に思う

### この国の哀しみ

過日上京し、夜遅く駅前ホテルに宿をとった。

窓からぼんやり駅前の広場を見下ろしていると、サラリーマン風の男性同士が激しい口調でののしり合い、殴る蹴るのけんかを始めた。そのうち片方が路上にうずくまり、「悪かった。許してくれ」と土下座して謝っているようであった。通行人は多かったが、暴力男を一瞥して通り過ぎるだけで誰も助けようとはしない。しばらくして警察官数人が駆けつけて、やっと修羅場はおさまりを見せた。

道向こうの交番では酔っぱらいが警官にからみ、どこからか鶴のように集まった若者がネオンの下で通りすがりのギャルたちに声をかけ、その横では妖しい笑いを浮かべた

飲み屋の女性が客引きをしている。そのとき突然サイレンを鳴らしてパトカーが走り去ったかと思うと、今度は救急車が逆の方向へ走り抜けた。街は欲望と犯罪の巢窟だ。少し前のことになるが、駅のコンビニの店長が盗みに入った男に刺されて亡くなるといふ気の毒な事件が起きた。また、つい最近では定期券を買うために並んでいた女性が「見も知らぬ男から背中を刺される」という痛ましい事件もあった。加害者は「刺すのは誰でもよかった」と供述している。これではけんかの仲裁に入ることはおろか、安心して街を歩くことすらできない。

日本が世界でも屈指の治安大国といわれたのはすでに過去の神話になりつつある。そもそも、警察官がカジノ賭博や麻薬に手を染めたり、教育者や判事までが買春に走る時代だから取り締まるどころの話ではない。

けれども彼らも人間。心の弱さ、危うさ、出来心というものを考え合わせると、ストレス社会の犠牲者といつてよい。だが、身を律する意識の低下が社会を虚無の深淵に引きずり込む元凶の一つとなっていることだけは否めない。

こうしたニュースを知るのは新聞・テレビなどのマスメディアを通してだから、悲観的な暗いニュースを多く取り上げがちな報道によって害されているのかもしれない。事

実はほんの一部の人間がやっていることであつて、大多数はそうではないはずだ。

けれども、戦後廢墟はいきよの中から立ち上がり、復興、成長を遂げる中で政治、経済、教育などあらゆる領域において社会正義が希薄きはくになり、動脈硬化的な世相を醸かもし出していることだけは事実だ。

何より、少女たちの性のモラル低下は目を覆うばかりだ。「出会い系サイト」から児童買春事件が急増している。昨年、摘発された出会い系サイトがらみの児童買春のうち、勧誘の状況が判明した事件では93・8%もが少女からの誘いであることが分かった。これでは彼女たちを「被害者」と呼ぶわけにはいかない。カネのために安易に身体を売る風潮は、先進国の中では日本が圧倒的に多いという。

警察庁は、この「出会い系サイト」の利用を規制する方針をようやく打ち出したが、対策はいつも後手ごてばかりで規範を示すことができない社会の責任は重い。

この国は今や、経済破綻はたん、知力低下、自信喪失そうしつ、倫理崩壊りんりほうかいの病める国になり下がってしまった。これを舞台にしてエゴイズムに生じた魔性ましやうが、これからなおも猛々たげだけしい形相をして世の中を跋扈はつこするかと思うと、僧侶としてやるせない気持ちに襲われる。

\*

自殺者は四年連続で年間三万人を超え、自殺未遂者はその十倍を超えている。特に、男性の自殺は女性に比べて三倍近くもあるといい、それも団塊の世代が多いらしい。

ちょうどこの草稿に向かっているとき、五十四歳の働き盛りの男性が、ダムに飛び込んで自殺するというニュースを耳にした。過労もあったのだろうが、会社でリストラ名簿を作る仕事を負わされ、二十五人を選抜する判断を委ねられていたという。その苦痛と葛藤の果てに死魔が自殺を選択させたのだろうか、辛かったにちがいない。

自殺者が死後に赴く世界は暗黒世界というが、私には一概にその行為を卑怯と断じることができない。「自殺など精神的に弱い人間がやることだ」と、あざ嗤う人間もいるが、何事もその立場に立たねば分かるものか。会社の利益のためなら同僚でも部下でも平然とクビを切れる「強い」人間にならねばならないとしたら、それは人間の皮をかぶった獣だ。そこまでやらされるのなら、三行半を叩きつければよかった。

自殺といえ、少し前、破産寸前の会社の社長が資金調達の相談で寺を訪ねられたことがあった。聞けば、銀行の融資担当者は「本店稟議にかかけます。大丈夫ですよ」と答えたが、手形決済の直前になって断ってきたという。

資金が調達できるよう祈念をしている最中に、ふとこの人は自殺するのではないかと

いう思いに駆られた。「死ぬなんて馬鹿なことを考えたらいけないよ」と叱ると、「従業員や家族のことを想うといたたまれないんです」と堰を切ったように泣き崩れた。

この社長、経営内容の悪さから融資を断られたのだろうが、銀行も危急存亡のときである。自己資本率アップのために躍起になっている。政府が公的資金を注ぎ込む一方で、貸し渋り・貸し剥がしする銀行の非情さを考えると、厭世的になるのも分らないではない。

だが、仕事が果たしていのちと引き換えるほどのものなのか。倒産や自己破産はごまんとあるし、生きていけば良いことだつてある。「こんなときは酒でも呑んでぐつすり眠るしかない。この際、憎つき銀行に不良債権の上積みを見せてやるしかないよ」と、気休めな言葉で励ます以外になかった。救つてあげたいのに救つてあげられない哀しみとこの国への痛憤が込み上げる。

会社の倒産による経営者の自殺には、その挫折感に起因するだけではなく、いのちと引き換えの生命保険金によって、債権者への償いや家族の救済という情念から起こる場合が多いという。いのちを担保に借金を相殺したり、ヤミ金融に追われて自殺に走るとするのは、もうこの国特有の病理現象で、取り立てて驚くことでもなくなつた。



数年前、私はその苦しみから逃れるために飛び込み自殺によって知人を失う哀しみを体験している。

\*

「僕は、どんなに貧しい生活でも父とともに過ごしたかった。優しくかった父と一緒に過ごしたかった。父と酒を飲みたかった。そんな夢はもう叶わない」

これは家族を救うために生命保険といのちを相殺した父を持つある青年の手記である。まだ中学二年という将来に夢馳せる頃、突然置き去りにされた衝撃は計り知れない。妻にしても、他人からどんなに同情されようと払拭できない哀しみに加え、「自分のせいではないか」という葛藤に苛まれ続ける。そして押し黙る遺影への苛立ちが心身を消耗させ、絶望の淵に導くことさえある。

けれども、冷徹だった父親ならいざ知らず、楽しかったこと、優しくかった思い出の一つも残してくれたのなら許してあげてほしい。一般的に父親という存在は強そうに見えて弱く、哀しいまでに家族を愛する人間なのである。

経済不況はまだまだ続くことを覚悟しなければならぬが、どういう状況に置かれても柔軟に、粘り強く生き抜く勇気がほしい。病める人にも、貧困に喘ぐ人にも太陽は

平等にうらかな光を降り注ぐ。自分の歩みを振り返り、生きる目的をよく考えて心だけは平穩へいおんでありたい。

倒産や失業、借金ぐらいで、死を選択するのはあまりにも自虐じぎやく的で、視野が狭すぎる。いのちと引き換えにして媚こびるほどの社会でもない。プライドさえ捨てれば何をしても食っていけるはずだ。

昨年の暮れ、京都のとある信用金庫に元不動産会社の役員をしていた男が押し入り、拳銃で脅おどして職員四人を人質にし、会議室に立てこもるといふ事件があつた。翌日未明、男は人質強要処罰法と銃刀法違反の現行犯で逮捕されたが、動機は融資トラブルにあつたという。男の部下だった女性三人は「信金のせい倒産した」と彼をかばつた。やつてはならぬことだが、その気持ちも分からぬわけではない。

思えば、つい最近まで日本人が一生を託した職場は、収入の源泉であるとともに誇りと責任の対象であり、人間関係を学び、生きがいを実感し得る拠点でもあつた。そこには働くことが家族のためであり、日本を支えているという喜びと確信があつた。けれども二十一世紀が到来して以来、高齢化、情報化、グローバル化といった時代の波が職場や家族、さらには社会を揺るがし、加えて未曾有みぞうの経済不況がかけがえのない生きがい

まで奪いつつある。

いつの間にか、働くということ、家族を養うということが自己の存在価値を確認する場ではなく、逆に人間を脅かす場になってしまったこの国に、私は深い哀しみを覚える。

### 遺恨の情念

「おまえ、そんな銃で何をするつもりだ？」

「こうでもしないと、おさまりがつかないんだよ」

「人生を棒に振るつもりか。残された家族はどうなるんだ！」

「分かっちゃいるが、あいつらを叩きつぶさなきゃ気が済まない」

「仕方ないじゃないか。あきらめろ」

「もう止めたって無駄だ。こいつで思いを晴らしてやる！」

これは人の会話ではない。鬱積した恨みを晴らそうとする悪玉と、それを制止しようとする善玉の心象風景である。

勧善懲悪の意図からつくられた江戸時代の草紙などの絵には、顔に「悪」や「善」

という字が書かれた悪人や善人が登場する。これが転じて悪事を働く者を悪玉、善事を働く者を善玉と呼ぶが、意識の世界にも善玉と悪玉が棲すんでいる。

もちろん、人間の心は「善か悪か」というような単純な二元論で表すことはできない。白でもなく黒でもないグレーゾーンにこそ真実は多いのだから、ここでは善と悪について考えたい。

貪欲どんよく、狡猾こうかつ、残忍ざんにんな心を悪玉とすると、勇氣、協調、慈愛じあいの心は善玉である。そして、この善玉と悪玉が気分に応じて意識界をめまぐるしく動き回る。

誰の心にも醜みにくさと美しさ、強さと弱さ、冷たさと温かさがあり、それが気まぐれに変化する。菩薩ぼさつのように慈愛にほほえむかと思えば、悪魔のような残忍さに狂い立ち、高尚な気分に戻るかと思えば、氷底の深みに沈淪ちんりんする。実に、人間は強そうで弱く、どう転ぶか分からない危うい存在なのである。

善玉は人間が本来所有する優しい心であるが、悪玉は環境、生い立ちといった二次的な「縁」の中で芽生えてくる。この世に生まれつき悪人などいはいはないが、虚無感きよむかんや欲望などに生じた悪玉が、時として人格を歪ゆがませ、異常に狂わせるのは紛れもない事実だ。

心の世界は実に不思議である。上部には表層意識があり、その奥には果てしない広がりを持つ氷山の下部のような深層意識がある。外部の事象は五官によつて表層意識を経由して、良いことも悪いこともすべて深層意識に蓄積される。この蓄積されたエネルギーを仏教では「業」と呼ぶ。

この業について、広辞苑には「行為。行動。心や言語のはたらきを含める。善悪の業は因果の道理によつて後に必ずその結果を生むというのが仏教およびインドの多くの宗教の説」とある。仏陀は「業によつて世界は存し、業によつて人々は存する。生存する者は業に束縛される。あたかも行く車の轄に結ばれる如く……」と説かれている。

業には善業というものもあるが、最近の世相には悪業をさらす人間の方がやたらと目に付く。不安、挫折、絶望などの悪想念（悪なる想い）に生まれる悪玉の中には、己の欲望のために、あるいは報復のために心の底でひそかに殺傷の刃を研ぐ者もいる。犯罪を正当化することはできないが、通り魔事件から、親殺し、子殺し、祖母殺しなど、ありとあらゆる凶悪犯罪は、歪みによつて魔性化した悪玉の所作である。

本来、人間はそうした悪玉を打ち消す善玉を自己の内面に持っているが、時として成長が早い悪玉は善玉の忠告を耳に入れず、強大なエゴイズムの悶えを爆発させる。その

とき悪玉は不気味な魔性に豹変するのである。

凶悪犯罪が最近とみに多くなっている背景にはこうした事情がある。マスコミが大騒ぎしているだけの話だと指摘する声もあるが、かけがえのない人生を悪業にさらされて棒に振る者たちには生きる希望がないのである。

人は犯罪者をあざ嗤うが、かけがえがないからこそ人間は絶望の闇に吠えることもある。このまま苦しみに満ちたまままで無残に朽ち果ててしまふみじめさ、やるせなさ、いかにも幸福そうに見える他者への羨望や遺恨の情念となつてふくらみ自暴自棄に陥らせて、殺傷行為に走らせるのである。

たとえ自分の未熟さが原因と分かつていても、挫折感や疲労感まで理性で抑えることはむずかしい。これはもう人間の限界、業の所作といつてよい。弱く、危うい性と思えばよいよ人間は哀しい動物というほかない。

\*

昨年の夏、札幌で姑が嫁を殺害するという事件が起こつた。

警察は、姑が嫁を二階から突き落として、階段の角で何度も頭を打ちつけたと見て逮捕した。姑は七十七歳、嫁が三十九歳。同居の果ての悲劇ということになる。

姑の息子は歯科医院を営み、生活に不自由はなかった。嫁も料理上手で、小学生の子どももいて、新築の一軒家に住んでいた。はたからは何の悩みもない家族のように見えだが、内情はまったくちがったようである。

この事件から数日後、息子も共犯の罪で逮捕された。犯行を目撃しながら救急措置をとらなかつたとみて、警察は「死んでくれた方がいいと考えていたから助けなかつた」として、「不作為の共犯」を挙げた。不作為——。早い話が、妻を見殺しにしたということだ。

この事件について、ある人は「嫁が姑をいびっていた」と言い、またある人は「姑の方が偏屈へんくつだった」と、それぞれの見方をする。息子はそれまで二度の離婚をしていた。これも嫁姑の折り合いの悪さが原因だったという。世間体せけんていを考えると、これ以上の離婚を繰り返すことはできない。双方に「我慢がまんしてくれ」の一点張りだったとも伝えられているが、息子はどちらかといえば母親の味方だった。

息子にしてみればどんな母親であつたとしても自分を育ててくれたかけがえのない母親なのである。恩愛おんあいの絆きずなを断つということは、親を想う心の善玉を殺すことを意味する。これは苦しい。ただ、狂い立つ母親から妻が殺されようとしている場面で、それを

見過ごすというのは理解できない。別居という方法もあつたのではないか。

嫁殺しという行為だけを見ると一方的に姑だけが悪いことになり、鬼婆おにばばとののしられても仕方がないが、七歳の孫からまで「クソババア、死ね！」などの暴言を吐かれると、嫁が自分の悪口を吹き込んでいるにちがいないと悪想念あくそうねんがふくらみ、怒り心頭に達するのむむなるかなである。

裁判では、その犯行が単なる衝動から起こつたものか、計画的であつたかが焦点となるだろうが、そこには伏線があつたようだ。人前ではうまくいつているように装つてはいたが、一つ屋根の下にいながら八年間という長い間、食事を共にしたことはなかつたという。嫁の実母も娘を頼つてこの家に移り住んでいた。性格、感性、風習など微妙なちがいから起こる相性の悪さに加え、そういう複雑な家族構成からか、だんだん二人の仲は険悪になつていったのだろう。

言えばけんかになるからと対話を避ける。姑にとつては多勢に無勢。そうした断絶状態が遺恨いこんの情念をふくらませ、ささいなことが引き金となり、我慢がまんが一挙に爆発することもある。自分だけをのけ者にして楽しそうに庭でバーベキューをする家族の姿を見て、突如として殺意の魔性ましようが噴き出したにちがいない。



それにしても七十七歳といえは喜寿。積み重ねてきた人生は重い。晩節を汚す最悪の結末を迎えたが、嫁の怨念を背負い、社会にさらされ、老軀の余生を獄中でどう過ごすというのだろうか。

数日後、いじめが原因で八十一歳の姑が自宅に放火し、確執の嫁を殺害しようとしたという別のニュースを聞いた。家は丸焼けになったらしい。

嫁姑問題は後に譲るが、一般的に人間は、家庭のこと、職場のことになるとよほど親しい人でない限り、その愚痴をこぼすことはない。にもかかわらず、心の天秤の指針はささいな言動で大きく振れるようにできている。鬱積した不満がささいなことで破裂する可能性は誰にでもあることを考えると、人間なんて刑務所の塀の上をかううじてバランスを取りながら歩いているような危うい存在なのである。

ただし、悪想念に生まれた悪玉がいかに相手を奈落の底に引きずり込もうとも、善玉まで打ち砕くことはできない。人間共通にひそむ善玉は、害された者の怨念を引き寄せた磁力のようなものを持っている。このときほとんどの加害者が良心の呵責に苛まれる。悪玉ばかりの人間にも死後に無量の苦が待ち受けている。仏陀は「因果応報」として次のように仰せられている。

他にくるしみを

あたえるによりて

おのれのたのしみを

求むる者

怨憎おんぞうの繫縛けいばくに絆ほだされて

ついに怨憎を

のがるるの日なし

### 悪玉の更正

ずいぶん前の話になる。一九五九年（昭和三十四年）、雨の夜の出来事できごとだった。

とある一軒の農家へ押し入って主婦を絞め殺し、その夫にも重傷を負わせる事件があった。犯人はNという男性。彼が強奪したのはわずか二千円。だが、結果的に強盗殺人罪ということになり、事件から八年後、三十三歳の若さで死の階段を上がることにな